日本下水道新聞

2011年(平成23年)3月2日

人中心の成長路線描く

日本水工設計社長　國本（くにもと） 博信（ひろのぶ）氏

忙中閑話

創業以来初のプロパー社長として、國本さんが11月26日付でトップに就いた。「こだわりを持たず」飛び込んだ水コンサルタントの世界。入社直後に任された日本下水道事業団の仕事で懸命に取り組む姿勢が認められ「逆に顧客に仕事を教えてもらった」。以来、実務一筋30数年、しかも業界では異例の電気畑出身。堂々前社長が代表権を持つ会長にいる間に「社長業を勉強できる」としながらも、「現下の体制を維持しつつ発展させていきたい」と身も心も重責のなかにある。

現在の上下水道予算は、10年前に比べ激減し今後の見通しも不透明。体制維持には相当の覚悟と努力が求められる。しかし人員整理や給与削減という言葉を使うつもりは毛頭無い。コンサルタントの財産の一つは人。人材中心の成長路線を真剣に思い描く。そのうえで「現状のなかでどうすべきか、社員一人一人も考えるべき」と意識改革を求める。

今、多くの事業体は厳しい現状に直面しているが、逆にコンサルタントの役割は高まると見ており、意識改革を実現した自立した人材こそが先を見据える能力を備え、事業体に対し柔軟な提案ができると確信している。

余力あるうちに将来の成長の種をどれだけ残せるかと考えており、人材の意識改革と並行して新規事業の可能性を模索する。話題の海外展開については、社内で本格的に手掛けるべきとの意見が相次いでいるが、大きなリスクと投資が伴うだけに、慎重な判断が必要と冷静に分析中。一方、長寿命化計画支援は利益率こそ低いものの、将来の技術提案に向け「今は我慢の時」と捉えている。

もう一つの財産となる技術力は、特色あるものを数多く手掛けており、下水道向けにはエコ資源活用計画部を立ち上げ「難しいがやると決めた以上、覚悟を持ってやり抜く」と業界に先駆け処理場の自給率向上への提案を開始。浮上防止人孔もメーカと共同開発した。

また福岡県内では、ITソフトを活用した水道アセットマネジメントシステム構築をすすめており、下水道向けも開発中だ。「これからの時代、コンサルタントも特色ある技術をいかに保有できるかが鍵」と断言し、技術開発には継続的な投資を惜しまない考えだ。

終止、謙虚な姿勢を崩さない國本さん。語り口は淡々と思慮深く笑みを絶やさず。しかし実はかなり気が短い性格で、趣味の渓流釣りも「短気ほど釣果があがる」と微笑む。社長に就任してからは「休日くらい一人でいる時間を大切にしたい」と渓流釣りに別の目的が加わった。

昭和22年生まれの63歳。同48年東京電機大学工学部卒、日本水工設計入社。昨年11月に代表取締役社長に就任した。